全国54,000人の“海の救難ボランティア”の活動を支えます。

「青い羽根募金」にご協力を

青い羽根募金アドバイザー
阪神タイガース 城島 健司 選手

■募金の方法

口座振込みによる募金

郵便局
口座番号　00120-4-8400
加入者名　社団法人 日本水難救済会

銀　行
三井住友銀行 日本橋東支店
口座番号　(普)7468319
加入者名　社団法人 日本水難救済会
青い羽根募金口

インターネット募金

青い羽根募金　検索

クレジットカード　MasterCard　VISA　JCB　AMERICAN EXPRESS

電子マネー　ちょコム

- ホームページから以下の方法で募金ができます。
- クレジットカードはMasterCard、VISA、JCB、AMEXがご利用できます。
- NTTコミュニケーションズが提供するネット専用電子マネー「ちょコム」がご利用できます。

●お問い合せ先　0120-01-5587

募金フリーダイヤルでお申し出くだされば、振込料無料の専用郵便振替用紙をお送りします。

社団法人 日本水難救済会

〒102-0083 東京都千代田区麹町4丁目5番地 海事センタービル7階
TEL：03-3222-8066　FAX：03-3222-8067
http://www.mrj.or.jp　E-mail　V1161@mrj.or.jp

ありがとう競艇
「このイベントは競艇の交付金による日本財団の助成を受けて実施します」

平成22年度 日本財団 The Nippon Foundation 助成事業

マリンレスキュージャーナル

Vol 103 No 1
2011|1月号

特集 マリンレスキュー紀行

海の安全にかける男たちの群像

社団法人 琉球水難救済会
オクマ救難所／国頭救難所

MRJ歴史探訪シリーズ 第4回

ボランティア精神の源を訪ねて

「青い羽根募金 2010」活動レポート

社団法人 日本水難救済会
マリンレスキュージャパンは、(社)日本水難救済会の愛称です。

名誉総裁　年頭挨拶

新年明けましておめでとうございます。

本年も、全国の救難所員の皆様が、
海上における人命、船舶の救済に力を尽くし、
海上産業の発展と海上交通の安全確保に
寄与されますとともに、
国民の皆様から益々信頼され、
発展を遂げられますことを願っております。

平成23年1月1日
社団法人　日本水難救済会
名誉総裁　**憲仁親王妃久子**

年頭挨拶

本年も、海上の安全と安心のためのご活躍を祈念申し上げます。

社団法人 日本水難救済会
会長　**相原　力**

全国の地方水難救済会、救難所、支所の皆様、平成23年の年頭を迎え謹んで新年のご挨拶を申し上げます。

全国の救助員の皆様におかれましては、日夜を問わず海難救助出動などでご苦労されていること、まずもって感謝申し上げます。

皆様の海難救助活動状況を見ますと、人命救助などに立ち向かう積極的な姿勢が伺えるとともに、日ごろの訓練などにも熱心に取り組まれているご様子、本当に頭の下がる思いがいたします。

さて、昨年は12月末までに全国で357件の海難に出動し、320名、148隻を救助するなど多大な成果を挙げ、創立以来の累計で19万4,581人の人命を救助してきた実績を誇っております。これはひとえに全国の救助員の皆様の積極果敢な救助活動への取り組みと崇高なボランティア精神によるものと、改めて敬意を表する次第であります。

また、発足して25年を経過しました洋上救急事業は、延べ717件の出動が行われ、日本船舶はもちろんのこと、日本近海を航行する外国船舶からも高く評価されるに至っております。海上保安庁等関係官庁や関係諸団体の引き続きのご理解とご支援をいただき、当会の主要事業として本制度を推進して参りたいと考えています。

青い羽根募金事業については、始まってから55年が経過し、少しずつ国民の皆様に知られてきているかなという思いがありますが、募金金額としてはいまだしといったところであり、引き続き努力していかなければならないと考えています。

当会の運営は、日本財団や日本海事センターその他の諸団体の支援と地方水難救済会の水難救済活動がないと成り立たないわけですが、自らも財政基盤強化のため的確な事業運営を行い、人命救助等の公益事業を推進することが大切であると認識しています。

また、法人制度改革の中で当会は昨年10月に公益社団法人への移行認定申請をしたところであります。移行に当たっては、組織のガバナンスを一層強化し水難救済活動に的確に応えていくこととしています。

最後に、地方水難救済会をはじめ各救難所・支所の皆様のご健勝とご活躍、そして皆様にとりまして今年がより良い年となりますよう祈念しまして、新年のご挨拶といたします。

年頭挨拶

新年明けましておめでとうございます。平成23年の年頭に当たり、謹んで新年のご挨拶を申し上げます。

海上保安庁
長官　**鈴木 久泰**

（社）日本水難救済会におかれましては、明治22年の創設以来、これまで、約19万人に及ぶ尊い人命と約3万9千隻の船舶を救助するなど、輝かしい歴史と伝統を築き上げてこられました。

これもひとえに、尊い人命のため、献身的に救助活動に従事されている全国各地約5万4千人の救難所員の方々や、その活動をご支援いただいているご家族をはじめとする関係者の皆様の地道な努力の賜物であり、心から敬意を表す次第であります。

我が国周辺海域では、船舶海難や海浜事故等により毎年約1,500名の方が不幸にも亡くなられており、こういった事故が後を絶たない実情にあります。

海上保安庁では、巡視船艇・航空機の整備・高性能化を図るとともに、ヘリコプターからの降下技術、潜水、救急救命といった救助技術を有した機動救難士を主要航空基地に配置するなどの取り組みを行い、捜索救助体制の充実強化に鋭意努力しているところであります。

一昨年に発生した、八丈島付近海域において漁船「第一幸福丸」が消息不明になり、大規模捜索の結果、転覆した船内から約90時間後に乗組員3名を救助した事故、また、三重県熊野沖で船体傾斜した「フェリーありあけ」から、機動救難士等が乗員乗客28名全員を無事救助した事故については、昨年11月、当時の海難対策本部、潜水士および機動救難士が、防災功労者内閣総理大臣表彰を受賞するという評価をいただいております。

しかしながら、海上保安庁の勢力のみでは、初動の対応に限界が出てしまいます。全国津々浦々 1,200箇所余りに配置されている水難救済会の救難所の皆様方によって行われている迅速かつ的確な捜索救助活動は、漁業、レジャー等海上で活動されている方々はもとより、海上保安庁にとりましても誠に頼もしい限りであります。

一方、貴会の洋上救急事業におきましては、多数の傷病船員の方々を救助するなど、洋上における救急救命に大きな役割を果たしていただいており、船員の方々やそのご家族、関係者にとりましても非常に心強い制度であります。昭和60年の運用開始以来、昨年7月には、累積出動件数700件に達しました。昨年の出動33件の対象船舶の内訳を見ましても日本籍船16隻、外国籍船17隻となっており、この点からも国内外で高い評価を受けているところであります。これも、本来業務が多忙な中、海上保安庁等の船艇や航空機に同乗され、遥か洋上まで長時間に及ぶ往診等の労に当たっていただいている医師・看護師の方々や関係者の皆様のご理解、ご協力によるものであり、深く感謝申し上げます。

このような水難救済会の関係者の皆様方の崇高かつ献身的な活動に対し、海上保安庁といたしましても、誠心誠意支援させていただくとともに、緊密な連携のもと、海上における人命の救助に万全を期して参る所存でありますので、引き続き、皆様方のご協力の程、よろしくお願い申し上げます。

最後に、全国各地において、献身的にご尽力されている救難所員、医師・看護師等関係者の皆様のご健勝と、貴会のますますのご発展を祈念いたしまして、私の新年の挨拶とさせていただきます。

年頭挨拶

崇高なボランティア精神の下、暖かみのある社会に今後とも寄与し続けます。

社団法人 日本水難救済会
理事長　**坂本 茂宏**

平成23年の年頭に当たり、謹んで新年のご挨拶を申し上げます。

全国の救難所の皆様のご労苦により我が国沿岸域における水難救済事業は的確に推進されており、改めまして厚くお礼申し上げます。

当会は創立以来、諸先輩が築き上げられた水難救済の精神をしっかりと受け継ぎ現在に至るわけですが、一方で、地方組織の基盤強化を図るため、平成13年2月に全臨海都道府県41ヵ所に地方組織の整備が完成するなど、当会を取り巻く情勢の変化にも柔軟に応じてきたところです。

本会は全国に展開する社団法人として、地元自治体などの支援の下、地域のニーズを踏まえ地域的に偏りのない活動が期待されております。地方の水難救済活動がさらに理解され地元自治体等による支援を受けるためには、支部が中央法人の下部組織の形では十分な支援が期待できないことから地方ごとに独立した組織とする必要があり、中央と地方の役割分担を明確にするとともにそれぞれの組織基盤の充実化を図り、活動の活性化を促すことが時代にふさわしい形であるとの考えから、機構改革が推進されてきたものです。この機構改革が完了してから今年で10年経つところですが、地元自治体からの支援には強弱があるように思われます。

昨年10月に本会は公益社団法人への移行認定申請を済ませておりますが、申請に当たり定款および諸規則を見直し、組織の運営を的確に推進するよう対処しています。新定款では本会の事業として「地震津波等災害発生時への支援」を新たに盛り込んでおりますが、これによって地元自治体からの支援強化につながればと考えているところでございます。いまだ移行認定には至っていませんが、移行に適切に対処するとともに事業をさらに発展させて、次世代に伝えていく義務があると考えているところでございます。

次に、当会の運営に大きく寄与しております青い羽根募金でありますが、平成9年にNPO長崎県水難救済会で取り組みが始まった青い羽根募金支援自動販売機の設置も12月末で436台を数えております。設置に関係された地方水難救済会と海上保安官署の方々に改めてお礼申し上げますとともに、今後ともさらなる拡大をお願いするところでございます。一方、今後の課題としては、集まった浄財をさらに効果的かつ計画的に活用すべく、青い羽根募金運営協議会等により常に知恵を絞っていく必要があると思っております。

終わりに、当会の行っている水難救済事業は時代が移り変わってもその本質である人命救助という崇高なボランティア精神にはいささかの変化はなく、暖かみのある社会に今後とも寄与し続けるものと思っておりますので、地方水難救済会を始め、各救難所・支所の皆様のご健勝とご活躍、そして皆様にとりまして今年がより良い年となりますことを祈念し、新年のご挨拶といたします。

マリンレスキュージャーナル

Vol 103 No 1
2011|1月号

CONTENTS

01 名誉総裁　年頭挨拶
02 社団法人　日本水難救済会　会長　年頭挨拶
03 海上保安庁　長官　年頭挨拶
04 社団法人　日本水難救済会　理事長　年頭挨拶
06 マリンレスキュー紀行
海の安全にかける男たちの群像
社団法人　琉球水難救済会　オクマ救難所／国頭救難所
12 全国救難所のお膝元訪問
ニッポン港グルメ食遊記【沖縄県国頭村／国頭漁業協同組合】
13 MRJ歴史探訪シリーズ　第4回
ボランティア精神の源を訪ねて
「海事関係者からの奉納物　二」
15 「青い羽根募金2010」活動レポート
平成22年度　青い羽根募金強調運動／青い羽根募金支援自動販売機の設置状況／「青い羽根募金」寄付金付CD発売／「青い羽根募金」を原資としたライフリングプロジェクト
19 レスキューグッズの最前線
マリンレスキュー MONO ギャラリー
21 レスキューステーション NEWS
救難所だより　海難救助訓練
25 レスキューレポート　水難救助活動報告　海難救助／洋上救急
32 水難救済思想の普及活動レポート
35 MRJ 互助会通信
37 MRJ フォーラム　読者の広場
38 MRJ からのお知らせ

表紙：社団法人　琉球水難救済会 オクマ救難所の皆さん

マリンレスキュー紀行

海の安全にかける男たちの群像

社団法人 琉球水難救済会
オクマ救難所／国頭救難所

オクマ救難所の救助船から、色鮮やかに広がる沖縄の海を望む。

南の海で人々の命を守る、心優しきマリンレジャーのプロフェッショナルと海人（うみんちゅ）たちに出会う。

取材協力：JALプライベートリゾート オクマ、国頭（くにがみ）漁業協同組合

日本最南端の海洋県で、66救難所・1救難支所を展開

日本最南端に位置する沖縄県。沖縄本島を筆頭に160の島々からなり、南北約400km、東西約1,000kmに及ぶ広大なエリアを県域とする。

国内で唯一、亜熱帯地域に属し、一年中温暖な気候に恵まれるこの地は、山原（やんばる）と呼ばれる森林やサンゴ礁の海に象徴されるように、豊かな自然の宝庫でもある。とりわけ、コバルトブルーやエメラルドグリーンの輝きが魅力の海は、多種多様な魚介類を育み食を支える漁場として、釣りはもちろん年間を通じてマリンレジャーが楽しめる観光資源として、暮らしや産業の中で大きな存在感を放っている。

この沖縄で水難救済活動を展開するのが、（社）琉球水難救済会である。昭和32年3月に設立され、現在は県内に66救難所・1救難支所と一大ネットワークを広げる。海洋県沖縄の水難救済活動の中枢として、青少年を対象とした水難救済ボランティア教室や、マリンレジャーサービスを提供する事業者への安全管理講習会なども積極的に実施している。

今回は、この（社）琉球水難救済会に所属し、沖縄本島最北で人々の命を守るオクマ救難所と国頭救難所を訪ねた。

那覇港・泊ふ頭の近くにある（社）琉球水難救済会の事務所。

■（社）琉球水難救済会の活動実績

（出所：（社）琉球水難救済会）

	平成18年度	平成19年度	平成20年度	平成21年度	創立※～現在までの合計
出動した船（隻）	59	32	97	318	6,640
出動した人（人）	134	115	232	716	23,562
救助した船（隻）	7	4	15	7	1,134
救助した人（人）	19	22	26	29	3,783

※昭和32年3月

オクマ救難所

オクマ救難所の皆さん。「JALプライベートリゾート オクマ」のプライベートビーチにかかる桟橋にて。

南国のリゾートホテルに設置された救難所

取材地に続くゲートをくぐると、車窓の向こうにマリンブルーの海と白い砂浜が広がった。南国の開放感あふれる光景に、思わず歓声を上げる。

1つめの取材先であるオクマ救難所は、沖縄本島最北に位置する国頭村にあるリゾートホテル「JALプライベートリゾート オクマ」の中に設置されている。ホテルでマリンレジャーのインストラクターを担当する「マリンセクション」のスタッフや、そのOBOGが主となって救難所を運営。現在、18名の所員が所属している。この日は、ホテル総支配人であり救難所長も務める木下和男さん、マリンセクションを統括するS&Rグループのグループ長である金城肇さん、マリンセクションの主任である森友秀さんがお話を聞かせて下さった。

「私たちが担当するエリアの特徴は、年間を通じてたくさんのレジャー客が訪れること。釣りはもちろん、シュノーケリングやダイビングを楽しみにいらっしゃる方も多いです」と木下さん。那覇空港から車で約2時間のところにあるこの地の自然環境は雄大で美しく、“手つかず”と表現してもよさそうなほど。しかしその反面、鋭い牙を南国の自然は隠し持っている。「沖縄でマリンレジャーを楽しむ際、注意してほしいことの一つが海洋危険生物。ハブクラゲやオニヒトデが有名ですが、気づかずに接触し、ショックを起こして溺れたり、という事故の原因となっています」と金城さん。昨年も、猛毒を持つオニダルマオコゼを踏んだダイバーが亡くなる事故があったという。

海外勤務の経験もある木下和男さんは、世界のマリンレジャーに対する知識も豊富。

地元生まれ・地元育ち、沖縄の海を知り尽くす金城肇さん。約2年半前から水難救済活動に参加。

単独で海に入り、トラブルに遭遇するケースも

また、“陸から海へ直接エントリーできるポイントが多い”このエリアでよく見られるのが、管理者のいないビーチでシュノーケリングやダイビングを楽しもうとして事故に遭遇するケースだという。「誰もいない所で存分に沖縄の海の魅力を味わいたいという気持ちはわかるのですが」と森さんは苦笑する。「とはいえ、沖縄の海は潮の流れも複雑で、危険生物が多く生息している所もあります。やはり、しっかり管理されているポイントで遊ぶことをおすすめしたいですね」

絶対にしないでほしいのは単独で海に入ること、と森さんは続けた。「ダイビングには2人以上の単位で行動する“バディシステム”というルールがありますが、気軽に楽しめるシュノーケリングであっても、潮に流されたり危険生物と接触したりという“もしものこと”に遭遇する可能性があります。そうしたトラブルにも対処できるように、単独行動は避けてほしいですね」

水難救済活動歴14年の森友秀さん。子どもを対象にした水難救済思想の普及活動にも熱心に取り組む。

森さんが強い口調でそう語る背景には、10年ほど前にオクマ救難所が経験した一つの水難事故がある。エントリーポイントに車が1台止まったままになっている、という知らせを受け、海上保安署や警察、消防などの関係機関、そして漁協や救難所のダイバーが総出で海中を捜索。公的機関が既定の日数で捜索を打ち切った後も、家族の依頼を受け

水上オートバイは3台。救助活動ではその機動力が発揮される。

水上オートバイでの救助活動の際に、連結して使用するボディボード。

オクマ救難所の救助船は、33フィートのトローリング・ボート。

た救難所員は20日近くをかけて捜索を続けたが、結局行方不明者は見つからなかった。

「その方は単独でダイビングを行っていたようです。おそらく、ダイビング中に何らかのトラブルが発生したのだと思いますが、バディがいれば対処法はあったかもしれない。少なくとも、アクシデントが起こったまま、放置される事態にはならなかったと思います。マリンレジャーのルールを守ることの大切さを実感させられたケースでした」

水上オートバイを活用し、国頭救難所と連携した活動も展開

海に携わる仕事は、キッチン部門と同様、しっかりと技術を身に付けているスタッフでなければ任せられない、と木下さんは話す。「さらに水難救済活動には、海の状態のよくない場合が多い、溺れた人が助かろうと無我夢中になって救助者を引き込もうとする、などのリスクが伴います。ですから、オクマ救難所では、確かな経験を持つ中堅スタッフが中心となって救助活動を行い二次災害を防ぐとともに、若いスタッフに技術を伝承しています」

また、この救難所の特徴の一つとして、この後紹介する国頭救難所との協力体制を取っていることも挙げられる。「漁協が拠点となっている国頭救難所と連携して救助活動を行う場合、オクマ救難所では所有する水上オートバイを出動させ、水深が浅く救助船が入れないポイントを担当します。沖縄は浅瀬が多いので、機動力のある水上オートバイは救助活動に欠かせません」と金城さんは説明して下さった。

関東出身の森さんは、沖縄の海の魅力は美しい色彩、と語る。「それに、ほぼ一年中レジャーが楽しめることも大きな魅力ですね。だからこそ、ルールを守って遊ぶことが大切だと思います。シュノーケリングやダイビングも、体調が悪い時は中止する勇気を持っていただきたい。無理が命取りになることも、海では珍しくないですから。沖縄の海には、それ以外にもたくさんの楽しみ方があります。海の状況や自分の体調に合わせた方法で、素敵な思い出を作っていただきたいと思っています」

リゾートホテルという、もてなしの心が息づいた場所にある救難所。そこでは、マリンレジャーのプロフェッショナルが人々をしっかりと見守っていた。

国頭村の砂浜付近に立てられていた、危険生物への注意を促す看板。

沖縄ならでは、救難所が設置されたホテル

「JALプライベートリゾート オクマ」

海辺のリゾートホテルに救難所が設けられているのも、沖縄ならではのことではないだろうか。オクマ救難所の拠点となっているのが「JALプライベートリゾートオクマ」。美しい沖縄の海に臨む約1kmのプライベートビーチを有し、海水浴はもちろん、シュノーケリングやダイビングなど多彩なマリンレジャーが1年を通して楽しめる。救難所員でもあるマリンセクションのスタッフがしっかりサポートしてくれるので、安心して遊べるのも大きな魅力だ。国頭村の山原（やんばる）をたっぷり味わえるエコツアーも数多く用意されている。

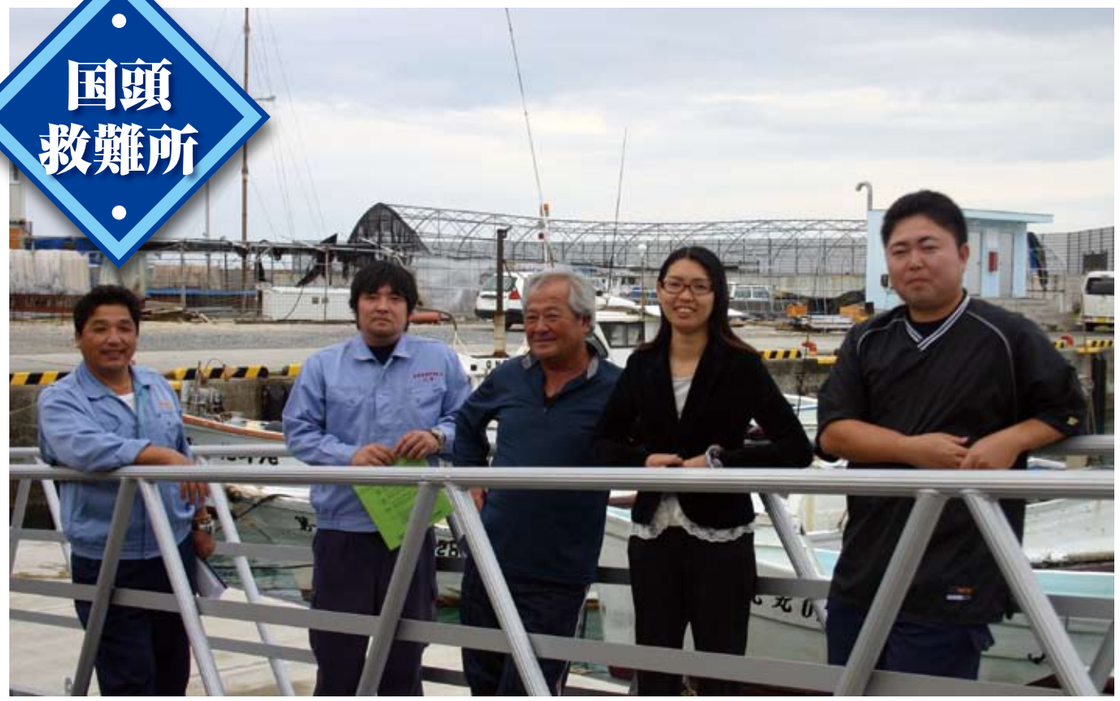
3万坪の敷地には客室のあるコテージやヴィラがゆったりと配され、レストラン施設や、海の眺めを楽しみながら入浴できる大浴場も。沖縄の豊かな自然とゆるやかに流れる時間を存分に愉しめるホテルである。

リゾート感あふれるカントリー調のフロント施設。受付には「青い羽根募金」の募金箱も。

救難所員でもあるスタッフが海のナビゲーターに。

白い砂と青い海のコントラストが美しいプライベートビーチ。

国頭救難所


国頭救難所の皆さん。国頭漁港をバックにして。

7つの港に109人の海人が所属し、迅速な救助を実現

オクマ救難所のある「JALプライベートリゾート オクマ」から車で10分ほど走った所に、次なる取材地、国頭漁業協同組合の白い建物がある。ここを拠点とする国頭救難所には、109名の海人（うみんちゅ）が救難所員として所属している。

ここでは、救難所長である大嶺嘉昭さんと、救難所員の金城信幸さん、大城力さんがお話を聞かせて下さった。

「船を持っている漁協の組合員が救難所員として水難救済活動に当たっています。担当区域は、国頭村から隣接する東村まで。この中に7つの港があるので、各港に所員を振り分け、事故地点に近い港に所属する所員に出動要請をすることでスピーディな救助活動を行っています」と大嶺さん。

国頭救難所の担当区域には、釣りの好ポイントとして知られる箇所がいくつもある。「大物のアーラミーバイなどが釣れるとして、さまざまなメディアで紹介されている辺戸岬の辺りには、週末になると50人近くの釣り人が集まっていますよ」と話す金城さんの後に、大嶺さんが続けた。「しかしこの周辺は岩場が多く、波の動きや潮の流れも複雑。特に怖ろしいのが離岸流で、表面上は穏やかに見えても、干潮時は引っぱる力が相当強くなります。気がついた時には沖にかなり流されていて、自力で戻れなくなっている。沖縄南部の海とも違う特徴を持っているので、そういったことを知らずに釣りに来た方が、事故に遭遇するケースがよく見られます」

多くの人命を救ってきた、国頭救難所の救助船。

豊かな知識と経験で水難救済活動の難局を幾度も打開してきた大嶺嘉昭さん。

海中に転落した釣り人をオクマ救難所との連携で救助

昨年10月に起こった事故も、やはり釣り絡みのものであった。

10月9日に開催された釣りのイベントに参加した釣り人4名はゴム

大嶺さんの頼もしい補佐役、金城信幸さん。国頭周辺の海の状況についての知識も豊富。

ボートで、沖合の大小2つの岩場に2名ずつ渡り、釣りを始めた。午前中は穏やかだった海は午後になって急変し荒れ模様となり、波のうねりが激しくなったことから、釣り人はゴムボートに乗って岸に戻ることができなくなってしまった。

「この辺りの海が急変することは、割とよくあります。漁師であれば天気予報をしっかり押さえながら経験を踏まえることで、何時くらいには状態が変わると予測できる。しかし、素人の方にそういった予測は難しいでしょうね」と救助を指揮した大嶺さんは言う。金城さんはうなずき、後で聞いたところ、事故に遭った方々も天候が崩れることは事前に把握していたようなのですが、と付け加えた。

「しかし、釣りに夢中になって辺りの様子に注意を払うのを怠ってしまった。岩場は岸からそう離れてはいないのですが、なにしろ海が荒れていて渡ることができない。やがて、小さい方の岩場にいた2名は海中に転落してしまいました」

海岸にいた釣り人が海上保安庁に通報し、要請を受けて国頭救難所も出動。岩場に救助船を乗り入れるのは困難であることから、オクマ救難所に水上オートバイの出動を要請し、2救難所の連携のもと、救助活動が展開された。

「転落した2名はクーラーボックスにしがみついて海面に浮いていたので、オクマ救難所の金城さんや森さんが水上オートバイで救助し、国頭救難所の救助船へ運んでくれました。大きな岩場で孤立していた2名は海上保安庁のヘリコプターで救助され、幸いなことに命を落とす人は出ませんでした」と報告書の作成を担当する大城さんが事故の顛末を話して下さった。

毎日が真剣勝負。経験と判断力で人々の命を守る

地形も潮の流れも特徴的なこの区域では、“海人の経験”が頼りにされるシーンも多い。最近では、捜索活動のスタート時などに警察や消防機関から意見を求められることも増えているそうだ。

国頭救難所の水難救助活動について、細部に至るまで把握している大城力さん。

「先日も警察と協働で捜索活動を行う機会があったのですが、よい経験になったと感謝の言葉をいただきました」と大城さん。そうした“海人の経験”は、日々の漁の中で後進に伝えているとのこと。そしていざ救助活動出動となったら、現場の救難所員にすべての判断を委ねる、と大嶺さんは日に焼けた顔の表情を引き締めて語る。「人命救助のシーンでは、1分1秒が生死を分けることもあります。そして我々がなんとしても防がなければならないのは二次災害。救える命を救い、救難所員が継続して水難救済活動に取り組むために、現場の人間を信頼し、その判断をなにより尊重しています」海人は毎日が真剣勝負なんですよ、と場の雰囲気を和ませるように言って、金城さんは笑った。

沖縄本島最北の地で出会ったのは、海を知り尽くしその知識と経験を人命救助に注ぐ、心暖かき海人たちであった。

昨年10月に起こった釣り人孤立事故の様子。2名の遭難者が岩場にしがみついている。

（社）琉球水難救済会は、この事案の救助に当たった2救難所と救難所員に感謝状を贈呈した。

全国
地方救難所の
お膝元訪問

ニッポン港グルメ食遊記

救難所の多くが活動の拠点としている港。そこには多彩な海の恵みが集まり、“そこならでは”の美味も……。
今回は、（社）琉球水難救済会　国頭救難所のお膝元、国頭漁港の「港グルメ」をご紹介します。

フーヌユーの作り方を説明して下さった大城力さん。

“知る人ぞ知る”国頭の海の恵み

フーヌユー
（シイラの日干し）

国頭漁港に面して建つ国頭漁業協同組合の建物の隣に、なにやら魚を干しているスペースが。「これは大型魚のシイラを干しているところ。こうして吊るすと、風がシイラの身を回転させてほどよく乾かしてくれるんです。天気や風の様子に合わせて1日半から2日くらい干すと、国頭名物『フーヌユー（シイラの日干し）』の完成です」と営業・販売を担当する大城力さん。このフーヌユー、沖縄でも知る人ぞ知る珍味。シイラは常に獲れるとは限らない魚のため、フーヌユーは市場には出荷されず、海人から直接購入するしか入手方法がないとのこと。国頭漁業協同組合ではフーヌユーの真空パック化を行うとともに、漁協が窓口となって商品化することも検討しているそうです。

家族揃ってフーヌユーが大好物という大嶺廣美さんにおすすめの食べ方を伺うと、「さっと湯がいてから、カラシナやニンニクと炒めると最高。お茶漬けの具としても美味しいですよ!」とのこと。早速、大嶺さんお手製の「フーヌユーの油炒め」をいただきました。ほんのりとした塩気の中にしっかりと旨みがあり、つい次から次へとお箸が伸びる美味しさ。

国頭村にはフーヌユーのほか、パイナップルやタンカン（かんきつ類の一種）など地元の素材を使ったオリジナルスイーツ「クニガミドーナツ」等、「ここにしかない」美味しいものが盛りだくさん!珍しくて美味しいものに目のないあなた、ぜひ国頭村を訪れてみませんか?

切り身にされたシイラは、太陽と風の力で美味しいフーヌユーに変身。

フーヌユーの油炒め。旨みが身にぎゅっと詰まり、いくらでも食べられる。

料理を振る舞って下さった大嶺廣美さんは、救難所長の奥様。

国頭漁協で扱っている魚介類。セイイカ、スク、シマイセエビ、アサヒガニなど種類が豊富。

卵・牛乳・動物油脂不使用のクニガミドーナツはサーターアンダギーよりも軽い食感が人気。

[国頭漁業協同組合]

（お問い合せ）TEL：0980-41-2588
（オフィシャルサイト）http://www.yanbaru-ichiba.com/

MRJ
歴史探訪
シリーズ

ボランティア精神の源を訪ねて…④

海事関係者からの奉納物 二

日本における水難救済の歴史を、多彩な角度から検証する本シリーズ。今回は、前回に引き続き、海事関係者より寄せられたさまざまな奉納物を見つめます。

◆ 船模型の奉納 ◆

船模型は船絵馬や大漁旗などと同じように海事関係者が海上安全を願って奉納されたものです。金刀比羅宮には、重要有形民俗文化財に指定された41艘もの奉納船模型が収蔵されています。

◆ 船模型の種類 ◆

船模型は指定によって7つの船種に分類されます。船種の内訳は「廻船」が26艘、「遊船」が6艘、「漁船」が4艘、「艀船」が2艘、「団平船」「長崎ペーロン船」「機帆船」がそれぞれ1艘ずつとなります。

このうち、2mを越える奉納模型の多くが、実物の縮尺10分の1の模型だといわれています。これは模型製作に船大工が携わっていたことと、深い関係があると考えられます。

◆ 船模型の特徴 ◆

模型の造りも実にさまざまです。前述の2mを越える船模型は、船内は少し省略されているものの、外観や組み方は実物と遜色のない精巧な造りです。一方、それよりさらに小型の模型は、船体が彫り抜かれていたり、船縁に造られた垣立（カキタツ）が外側から打ち付けられていたり、模型を縦に半分にして、背面が板に貼り付けられていたりします。ちなみに板に貼り付けられたものは、模型というより「造り出し絵馬」に近い感じに見受けられます。

また「長崎ペーロン船」のような、地方の特色ある船も奉納されています。

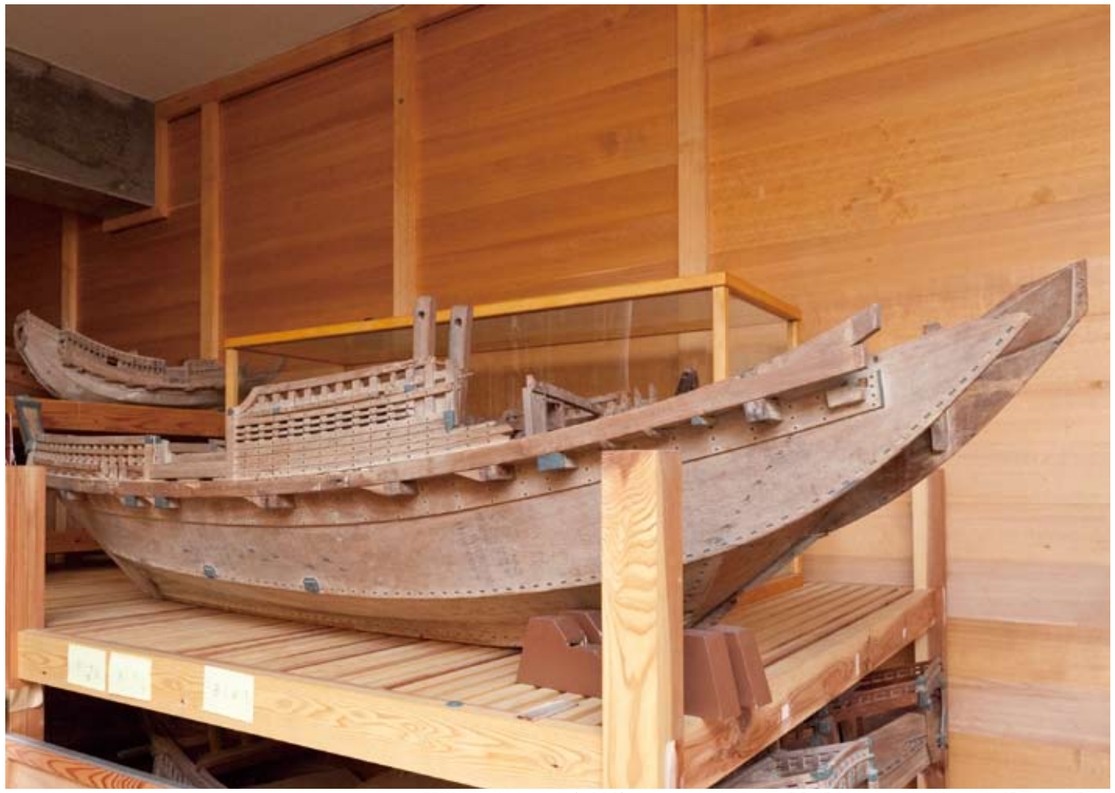
◆ おわりに ◆

以上、簡単ながら船模型についてご紹介いたしました。当宮所蔵の船模型は実に多種多様で、海の神さま・こんぴらさんにふさわしい質と量を誇っています。これらは純粋な信仰対象物であるとともに、造船史上の貴重な史料でもあります。

◆ 執筆者 ◆

金刀比羅宮禰宜
琴陵　泰裕氏

後期北前型弁才船。慶応元（1865）年奉納。讃岐小豆島の船大工仁兵衛の製作。



表菱垣廻船。文化5（1808）年、大坂剱先町京屋傳兵衛の奉納。製作は大坂海部屋市左衛門。

艀船。昭和11（1936）年、神戸市上組合資会社の奉納。製作は同社造船部の田中長右衛門。

全国 54,000 人のボランティア活動を支えます

「「青い羽根募金 2010」活動レポート

効率的かつ安全に海難救助活動を行うためには、常日ごろから組織的な訓練を行うとともに、救命胴衣やロープなどの救難資器材の整備や、救助船の燃料などが必要になります。これらの供給に必要な資金は、全国的に行われる募金活動などによって集められています。

藤沢海洋少年団の「青い羽根募金」活動の様子

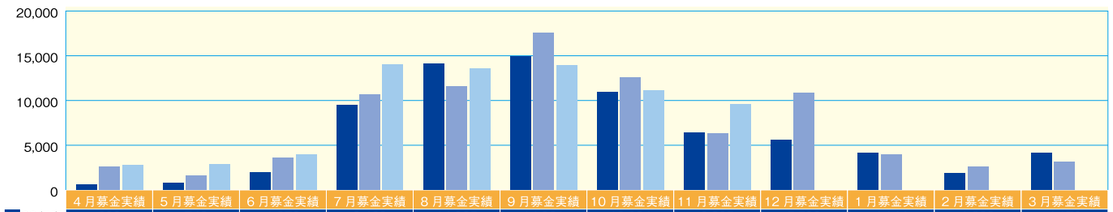
平成22年度「青い羽根募金」の状況

本年度も「海の日」を中心に7～8月の2ヵ月間を「青い羽根募金強調期間」と銘打ち、全国都道府県水難救済会と協力して積極的に募金活動を実施。全国の多くの皆様が、青い羽根募金の趣旨へのご賛同のもと、暖かなご支援を下さっています。

海上保安庁、防衛省など関係省庁をはじめ、都道府県、企業、団体などからもご支援をいただきました。特に防衛省の陸上、海上、および航空自衛隊の隊員の皆様や、海洋少年団および学校生徒会の皆様に募金活動へのご協力をいただきました。

皆様のご支援により、11月(4月から11月末の集計)までに、71,303,126円の募金をいただきました(下図・青い羽根募金実績参照)。今年度11月末現在の募金額は、平成21年度同期の実績を約500万円以上上回っています。

■青い羽根募金実績 単位：千円



	4月募金実績	5月募金実績	6月募金実績	7月募金実績	8月募金実績	9月募金実績	10月募金実績	11月募金実績	12月募金実績	1月募金実績	2月募金実績	3月募金実績
20年度	600	743	1,970	9,469	14,065	14,931	10,924	6,395	5,599	4,144	1,888	4,170
21年度	2,562	1,563	3,543	10,637	11,536	17,519	12,595	6,289	10,814	3,941	2,608	3,155
22年度	2,775	2,889	3,980	13,988	13,566	13,887	11,150	9,604	集計中	-	-	-

「青い羽根募金」にご協力いただき、ありがとうございました。

SGホールディングス(株)様

平成22年12月17日、佐川急便(株)本社東京本部において、CSR環境担当理事別所恭一様へ、日本水難救済会 坂本茂宏理事長から日本水難救済会会長感謝状を贈呈しました。

SGホールディングス(株)様からは、毎年、多額の募金をいただいております。

藤沢海洋少年団の皆さん

藤沢海洋少年団は、平成22年9月26日、第37回藤沢市民まつりに併せJR藤沢駅において、また、同年10月3日、ふじさわ健康メッセ2010の会場である藤沢市民会館において、「青い羽根募金」活動を行いました。

遊覧船かすみ丸(有)様

平成22年11月12日、兵庫県香美町役場において、遊覧船かすみ丸有限会社代表山口都子様へ、兵庫県水難救済会 長瀬幸夫副会長から日本水難救済会会長感謝状および事業功労有功盾を贈呈しました。

陸上自衛隊　練馬駐屯地様

平成22年12月12日、陸上自衛隊練馬駐屯地において、同駐屯地司令小林英彦様へ、日本水難救済会　上岡常務理事から日本水難救済会会長感謝状および事業功労有功盾を贈呈しました。

航空自衛隊　芦屋基地様

平成22年12月14日、航空自衛隊芦屋基地において、同基地司令吉松卓夫様へ、(社)福岡県水難救済会　井手善来会長から日本水難救済会会長感謝状を贈呈しました。

福岡県大野城市様

平成22年12月17日、大野城市役所において、同市長井本宗司様へ、(社)福岡県水難救済会　今林久副会長から日本水難救済会会長感謝状および事業功労有功盾を贈呈しました。

琉球アイランズ スポーツフィシング アソシエーション様

平成22年7月1日、那覇市内パレットくもじ広場において行われた青い羽根募金運動出発式に併せ、琉球アイランズ　スポーツフイッシング　アソシエーション会長マーク　ペイン様へ、(社)琉球水難救済会　比嘉榮仁会長から日本水難救済会会長感謝状を贈呈しました。

海上自衛隊　佐世保総監部様

平成22年10月13日、海上自衛隊佐世保地方総監部において、同総監部防衛部長筧豊隆様へ、NPO長崎県水難救済会　福田一幹副会長から日本水難救済会会長感謝状および事業功労有功盾を贈呈しました。

青い羽根募金支援自動販売機の設置状況

日本水難救済会では、売上金の一部が青い羽根募金に還元される「青い羽根募金支援自動販売機」の設置を全国的に推進しています。平成22年1月から新たに110台が設置され、12月末現在、全国の設置台数は436台となっております。

福島県水難救済会

福島県水難救済会では、平成22年8月13日、いわきサンマリーナに支援自動販売機第１号機を設置。同日、関係者が出席し除幕式が行われました。

また、同年10月5日には、双葉郡双葉町の「社会福祉法人恵眞会　まどか幼稚園」のご厚意により園内に支援自動販売機第2号機を設置、関係者によるテープカットの後、同園園児による鼓笛パレードと合唱が披露され、設置が盛大に祝われました。

「青い羽根募金」寄付金付CD発売

潜水医学講座館山セミナーのオフィシャルソングで、その売上金の一部が「青い羽根募金」として寄付される寄付金付CD「減圧ソング」が11月5日、全国発売されました。

この歌は、ユニットバンド「Kyat」（木村恵さん、山口芳明さん、橋口ゆうさん）が歌うもので、平成22年6月26日に開催された潜水医学講座館山セミナーの中で、音楽を通じて楽しく安全潜水を啓蒙しようという企画により生まれたものです。

「青い羽根募金」を原資としたライフリングプロジェクト

佐賀県水難救済会は、平成21年夏期の北部九州におけるマリンレジャーによる事故死が過去4年で最多の19名（第七管区海上保安本部発表）にのぼったことから、唐津海上保安部の指導を受け、「青い羽根募金」を原資として、県内の転落事故発生のおそれのある水辺に救命浮環を順次設置する「ライフリング（命の環）プロジェクト（救命浮環設置事業）」を展開。平成22年12月現在、コカコーラ・ウエストジャパンの協力を得て救命浮環内蔵型の青い羽根募金支援自動販売機11台を設置したほか、スタンド型17台、防波堤灯台等航路標識直付型1台の合計29台を設置しています。

佐賀県水難救済会では、引き続きライフリングプロジェクトを進めていくこととしております。

また、（社）福岡県水難救済会およびNPO能登水難救済会においても、海中転落のおそれのある岸壁や海水浴場等に救命浮環を設置し、海難事故に備えています。

救命浮環内蔵型の青い羽根募金支援自動販売機

スタンド型の救命浮環

唐津港唐房2号防波堤灯台に設置された防波堤灯台等航路標識直付型救命浮環

（社）福岡県水難救済会が設置した博多港中央埠頭3号岸壁の救命浮環

NPO能登水難救済会が設置した救命浮環

【海中転落事故の発生状況】

海上保安庁が発表した平成17年から21年までのマリンレジャーに関する海浜事故およびマリンレジャー以外の海浜事故における防波堤、岸壁、消波ブロックからの海中転落事故者数および死者・行方不明者数は、下表のとおりです。

また、平成21年には、岸壁または防波堤から海中転落したものの、付近に設置された救命浮環が使用されたことにより、5名の尊い命が救助されています。

	事故者数	うち死者・行方不明者数
防波堤	497人	252人
岸壁	1,460人	815人
消波ブロック	133人	62人

～現場で役立ちそうなMONO～

今回は、数ある資器材の中でも、『マリンレスキュージャーナル』編集部が注目する「特に役立ちそうなグッズ」として、メガホンと救命胴衣をご紹介します。

蓄光型・防水メガホン

海難事故遭遇時に自分の存在を周囲に伝えるためのものとして、また水難救済活動時に遭難者に呼び掛ける器材として常備しておきたいメガホン。

小型で救助活動の邪魔にならないもの、防水タイプや蓄光・サイレン機能を備えた機種など多機能型のものも、手ごろな価格で購入できるようになっています。

写真のTS-613L型は、ホーンマウスに蓄光樹脂を採用し、暗闇で長時間（15時間以上）発光するもの。防噴流型で、いかなる方向から水の直接噴流を受けても有害な影響を受けない構造となっているため、雨天時等の活動に最適です。

TS-613L型

写真提供：(株)ノボル電機製作所

救命胴衣

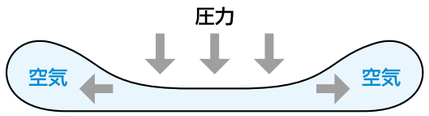
救命胴衣は構造によって、主に「気体封入式」「膨張式」「固型式」の3種類と、固型式と膨張式の要素を兼ね備えた「ハイブリッド式」とに分類されます。

構造ごとに浮力の得られ方や形状の違いなどがあるため、使用シーンや備える目的に合わせて選ぶとよいでしょう。

A. 気体封入式

気体を封入した気密性の袋を内蔵したもので、外観上は固型式とよく似ていますが、非常に柔らかく軽く作られています。気密性の袋を保護するため、表面に薄い固型の浮力材も使用されています。

写真のウクンダA8型は、気体密封式浮力体を前面部左右に各3本、後面部に6本の計12本を配して浮力を確保。空気を自由に移動させることで柔軟性を持たせ、作業性に優れた救命胴衣となっています。



外圧を受けると内部の空気が移動し、かさばらない構造。

ウクンダA8型

写真提供：日本船具(株)

B. 膨張式

浮力体として炭酸ガス等を使用するため、多くは非常に薄くコンパクト。膨張方法としては、自動式（水に浸かると自動的に膨張）と手動式（膨張作動用のひもを引くことで膨張）の2種類があり、作動すると内蔵のボンベから気密性の袋にガスが充填されて膨らみます。膨らみが足りない場合には、息で補充することもできます。

コンパクトなため人気がありますが、気密性の袋が破れる恐れのあるシーンでは、避けた方がよいでしょう。

●首掛け式

膨張する気密性の袋をマフラーのように首に掛けて、腹部のベルトで身体に固定して使用します。通常時は気室が畳まれた状態のため、固型式のものよりもかさばりません。小児用のものもあります。

BJ-1700型

●ベルト式

膨張する気密性の袋が畳まれて入っているケースを、ベルトのように腰に巻き付けて装着します。通常時は非常にコンパクト。落水した場合は、自動または手動で気室を膨張させます。

BJ-170型

写真提供：東洋物産(株)

C. 固型式

浮力体に発泡プラスチックなどの固型物を使用しているシンプルな構造のもの。最も普及しているタイプです。

●チョッキ式

衣類のチョッキ（ベスト）と同じような形状です。袖部の穴に両腕を通し、身体の前についた、ひもやファスナー、バックルなどを留めます。さらに、腹部のベルトや両脇の寸法調整部で調整して、身体にしっかりフィットさせます。

NS-JS型

●首掛け式

マフラーのように首に掛けてから、腹部のベルトを使って身体に固定させます。

NG-17型

写真提供：日本船具(株)

海難救助訓練

平成22年度の海難救助訓練指定数は、「救助訓練実施要領平成22年版」で各県水難救済会別に合計で300件が指定されています。12月22日までに報告のあった訓練実施状況は、全国31の地方水難救済会において、延べ249の救難所・支所から4,028人の救難所員が参加して実地訓練を実施しました。また、(社)北海道漁船海難防止・水難救済センター、伊豆地区水難救済会、石川県西部水難救済会において指導者研修が行われ、22救難所から57名が参加しました。

訓練の実施要領としては、毎年配布する当該年度版の訓練実施要領のほか、「救難所員訓練必携」と「海難救助作業マニュアル」を各救難所に配布しておりますので、近隣の海上保安部署や消防機関等に指導を依頼して基本をしっかり身に付け、いざという時の海難救助出動に備えて下さい。繰り返し訓練を行い基本をしっかり身に付けていることが、チームワークの取れた安全かつ効率的な海難救助につながります。

静岡地区水難救済会

平成22年10月16日、清水海上保安部より巡視船「おきつ」の派遣を受け、沼津救難所が沼津港にて小型船曳航や心肺蘇生、溺者救助の訓練を実施。海保職員からの実技指導を受けながら日ごろの活動での疑問点を質問するなど、参加者全員が真剣に取り組み、「海難事故がないことが一番ではあるが、いざという時にはこの訓練の成果を存分に発揮したい」という声も出るなど、海難救助の練度と士気向上につながりました。

また、「おきつ」の一般公開も行われ、沼津救難所は青い羽根募金を行いました。沼津港では初の一般公開ということもあり多くの市民が訪れ、沼津救難所としても絶好のPRの場となりました。

東京都水難救済会

平成22年10月16日、東京都新島町の新島港にて、東京都と新島町が合同防災訓練を実施。約500名が集まる中、式根島救難所と若郷救難所の救難所員20名も参加しました。

未明の近海地震災害や東海地震による津波災害の想定の下、緊急輸送や津波による漂流者救助、被災者の航空機輸送などの訓練を行いました。関係機関との情報伝達や連携救助体制の強化が図られ、事故防止意識も高揚する、有意義な場となりました。

NPO秋田県水難救済会

平成22年7月10日、八峰町の岩館漁港において海難救助訓練大会を行いました。秋田県知事(代理)や秋田海上保安部長など多数のご来賓、ならびに9救難所の救難所員247名と訓練参加・協力の10機関76名が参加しました。

はじめに日本水難救済会海難救助功労表彰を行い、戸賀救難所員2名に対し、NPO秋田県水難救済会　会長より表彰状および功労章を伝達。続いて永年勤続功労表彰を行い、23名の救難所員に表彰状などが授与されました。

訓練では、救難所員による救難技術競技(救命索発射、もやい綱投てき、ゴムボート競技)および関係機関合同による船舶火災発生を想定した初期消火訓練、浸水事故と海中転落者発生を想定した人命救助訓練が行われました。

救難所だより

山形県水難救済会

平成22年7月24日、酒田市の大浜海岸にて酒田救難所・宮海救難所・袖浦救難所による合同訓練を開催。救難所員61名のほか、酒田海上保安部など関係機関等から8名が参加しました。

救命索(もやい銃)操法や心肺蘇生法の訓練などを行ったほか、3救難所対抗戦によるゴムボート操法訓練も実施。最後には、漁船が防波堤に衝突し浸水・機関停止、意識不明のけが人が出ているとの想定による総合海難救助訓練を行い、救助手順の確認が行われました。

(社)福岡県水難救済会

平成22年7月15日、新宮町の相島海岸にて、相島救難所の救難所員23名参加による実地訓練が行われました。

5隻の船舶を使用し、浸水船救助、火災船救助、救命索発射を伴う乗揚船救助の訓練を実施。最初の浸水船救助では、事故を想定する船舶の両舷に救助船をつなぎ、小型ポンプを用いて排水作業を行いました。続く火災船救助では、事故想定船に向けて2方向から放水し、火災船から脱出した要救助者を船上に救助。最後に、浮き防波堤を乗揚船と想定し、2種類のもやい銃を使用して発射訓練を行いました。

班長の指揮の下、全救難所員が迅速かつ冷静に訓練を行うことができましたが、もやい銃については風向や風速を考慮した訓練が必要との反省もありました。

高知県水難救済会

平成22年11月10日、中土佐町の久礼港にて、高幡救難所の救難所員17名と、高知海上保安部・高幡消防組合消防本部など関係者21名の参加のもと、海難救助訓練が行われました。

高幡救難所が平成18年9月に発足して以来、初めての実地訓練でしたが、高知海上保安部や高幡消防組合など、関係機関のご協力により、情報伝達や消火、曳船などのほか心肺蘇生法の習熟など、救助活動に必要な訓練を展開し、救助技術の向上を図ることができました。

(社)北海道漁船海難防止・水難救済センター

虎杖浜救難所・白老救難所・登別救難所では、平成22年8月25日に合同で海難救助訓練を実施。各救難所から66名の救難所員が参加しました。

訓練では基本動作および点検のほか、ゴムボート操法や救命策発射器操法、心肺蘇生法を各救難所相互の競技形式で行いました。

また、総合演習として、「8月25日午後3時頃、漁船A丸は登別漁港から白老港へ回港中に機関室から出火し、自船による消火不能となり救助を求めている。乗組員1名が消火作業中に右足を負傷」との想定で救助船3隻による消火訓練、救命策を発射して導索を伸張しゴムボートを想定船に送って負傷者を収容する訓練、救助船による想定船の横抱き回航訓練を実施しました。

海難救助活動レポート

平成22年における海難救助出動件数は12月末現在357件で、320人の人命救助と148隻の船舶救助に関わりました。全国の統計でみると、海難救助に出動した救難所員は述べ5,096人、救助船は延べ1,979隻、協力船は延べ235隻でした。

これを昨年の同時期と比較すると、出動件数では90件減少し、救助人命は59人の減となっています。出動した救助船は1,327隻の減で、出動救難所員は5,617人の減となっています。平成21年は例年と比べて出動件数が多かったことに加え、1件当たりの出動救難所員が特に多かったことから、平成22年との差が大きくなりました。

連携プレーで高波から高校生を救う

NPO長崎県水難救済会千々石救難支所

平成22年7月28日午後2時20分頃、千々石海水浴場の高波があるところで高校生が遊泳していた。救難所員が注意しようと遊泳地点に向かったところ、高校生が高波にのまれたため、救助が必要になった。救難所員1名は付近にある救難所に救命胴衣を取りに行き、もう1名

が警察署に通報。救命胴衣を受け取った残る1名が海中に入り遭難した高校生に救命胴衣をつかませ、陸上の救難所員2名がロープを投げ高校生を浜へ引き上げた。

高校生は海水を大量に飲み病院に搬送されたものの、命に別条はなかった。

NPO長崎県水難救済会
千々石救難支所
吉岡 靖彦さん　平野 竜磨さん　平野 竜磨さん

燃料切れにより漂流した船を岸まで曳航

NPO能登水難救済会珠洲救難所

平成22年8月28日午後2時頃、珠洲市の鉢ヶ崎海水浴場沖で釣りをしていたプレジャーボートB丸は燃料が切れ、予備燃料タンクに切り替えようとした。しかし、燃料ホースの接続部を破損、漂流する事態となった。

帰宅が遅いため、家族が警察に通報。警察が保安部署に連絡し、巡視艇や救助艇などによる夜間捜索が行われた。

29日午前2時頃、海上保安庁の航空機が該船を発見、巡視艇にて曳航。出動していた珠洲救難所の救助船さざなみは途中から曳航を引き継ぎ、金川河口の係留地に着岸させた。

NPO能登水難救済会
珠洲救難所
所長 福光 鹿良さん
梶 雅彦さん　従二 恵二さん
向 将司さん　向 修平さん

転覆防止を図りながら座礁船を救出

鹿児島県水難救済会枕崎救難所

平成22年9月14日午前1時30分頃、漁船A丸は枕崎漁港へ航行中、枕崎市火之神岬町地先岩礁にて座礁。乗組員本人より指宿海上保安署へ通報があった。

出動要請を受けた枕崎救難所および救難所所属船にて情報収集と状況把握を行った後、転覆防止措置を施し自然離礁を待った。午前9時38分に離礁したため、救助船千恵丸で当該船を枕崎漁港へ曳航し、午前9時50分に入港した。

この事故によるけが人はなかった。船の被害状況はエンジンルームに浸水したのみで、油漏れもなかった。

鹿児島県水難救済会
枕崎救難所
松永 冨満男さん　松永 真二さん
栄村 千秋さん　栄村 広秋さん
禰占 敏弘さん　山神 幸伸さん
俵積田 謙三さん

強風の中、座礁した船から乗員を救助

青森県漁船海難防止・水難救済会竜飛救難所

平成22年10月16日午後2時頃、竜飛シーサイドパーク管理棟より、水中撮影していたダイバー2名のうち1名が消息不明との連絡が竜飛救難所に入った。外ヶ浜警察署および海上保安部に連絡するとともに、同行していたダイバーから情報収集。大時化で船を出港させることが困難であったため、潜水した場所の付近を徒歩で捜索することとし、救難所員を招集した。捜索したところ、湾になった箇所でフィンだけ見えている状態の遭難者を発見。捜索していた海上保安庁のヘリコプターに連絡し、救助が行われた。その後、遭難者の水死が確認された。

青森県漁船海難防止・水難救済会
竜飛救難所
所長 伊藤 逸雄さん
伊藤 春光さん　伊藤 繁美さん　沢谷 秀一さん　三浦 市雄さん　伊藤 静雄さん
沢谷 繁春さん　工藤 俊次さん　成田 富一さん　吉田 利智雄さん　伊藤 文雄さん
牧野 武春さん　三浦 鉄三郎さん　水島 光弘さん　伊藤 繁一さん

和歌山県水難救済会紀南西部救難所三尾支所

平成22年10月16日、釣り人2名はミニボートに乗船し、美浜町にある逢母海岸沖で釣りを行っていた。午後4時頃帰港のため船外機を始動しようとしたが、バッテリーの過放電により動かず、航行不能となって110番通報を行い、救助を要請した。

三尾支所の救難所員は和歌山県警の美浜駐在所・田辺海上保安部より出動要請を受け、午後5時頃、救助船に警察官1名を乗せ出動。10分後、逢母海岸南方沖約2,000m付近で漂流中の該船を発見し、午後5時20分頃、三尾漁港の岸壁へ曳航した。遭難者にけがはなかった。

伊豆地区水難救済会伊東救難所

平成22年11月11日、遭難者Cは釣り船Dに単独で乗って伊東港を出港。手石島付近で釣りをしていたところ、午後5時17分頃、脳出血を発症。携帯電話で家族に助けを求めた。下田海上保安部は家族から事故発生の通報を受け、午後5時50分頃、伊東救難所に救助出動要請を行った。救難所員6名が2隻の救助船で出動、手石島の浅瀬に座礁している釣り船Dを発見し、接近を試みた。しかし、自船も座礁する危険性があったため、救難所員1名が曳航索を持参して海中に入り、釣り船Dに乗り移った。曳航索を用いて釣り船Dを離礁させ、該船を下田海上保安部の監視取締艇に引き継いだ。遭難者Cは救急搬送され、一命を取り留めた。

(社)北海道漁船海難防止・水難救済センターえりも救難所

平成22年7月20日、採りこんぶ漁業を行っていた漁船E丸は、午前4時50分頃、濃霧となったため笛舞漁港へ帰港しようとした。しかし前方の視界が不良で笛舞漁港を見失い、陸上の目視もできず、行き先不明状態となった。その後、沿岸域と思われる海上に標識竿を発見し、E丸をつないで救助を待つこととした。E丸が帰港しないことから、午前5時頃、地元漁業者による捜索が開始され、午前6時15分頃えりも救難所長に協力要請が行われた。所長は救難所員を出動させるとともに浦河海上保安署に通報。地元漁業者・救難所員による捜索に加え、海上保安部による上空からの捜索が行われた。午前8時40分頃該船が発見され、えりも港に向けて誘導された。

山口県水難救済会仙崎救難所

平成22年8月14日、遭難者F他1名はプレジャーボートに乗船して仙崎漁港に向けて帆走中、午前7時15分頃、王子鼻灯台から真方位281度約1,200mにおいて乗り揚げた。

仙崎海上保安部の要請により、仙崎救難所は救助船市丸と第二裕真丸を出動させた。

現場到着後、第二裕真丸は該船の引き卸し作業を行い、午前9時15分頃離礁に成功。

その後、市丸が該船を仙崎漁港まで曳航し、午前10時頃救助が完了した。

(社)北海道漁船海難防止・水難救済センター知内救難所

平成22年8月19日午後0時40分頃、木古内警察署より「上磯郡知内町字中ノ川の木古内自動車学校前の海岸にて、68歳男性が波に流され行方不明となったため、漁船での捜索を願いたい」との電話連絡を受けた。

ただちに救難所長に報告するとともに救難所員に出動を要請。午後0時50分頃、現場まで500mの中の川漁港より救助船が出動した。

3隻の漁船に救難所員が分乗し、現場到着後すぐに捜索を開始。午後1時23分頃、遭難現場より150m南方にて海面に浮遊する遭難者を発見。直ちに引き上げ人工呼吸蘇生措置を施しながら、中の川漁港に午後1時25分に帰港した。

山形県水難救済会念珠関救難所

平成22年9月1日午前10時30分頃、国道を走行していた通行者が海上に異常な様子の漁船を発見。確認したところ、船に人がしがみついていることがわかった。もう1人の通行人から連絡を受けた念珠関救難所の救難所員が現場に駆け付け、岸から50～60mのところに該船が位置していたため、泳いで救助に向かった。

午前10時40分頃救難所員は船に泳ぎ着き、直ちに転落者を船に引き上げて小岩川漁港に向かった。10分後に入港し、着岸。待機していた救急隊員が船に乗り移り転落者に呼びかけたところ意識はしっかりしていた。午前11時頃、転落者は救急車で病院に搬送された。

青森県漁船海難防止・水難救済会平内町救難所

平成22年9月10日午前5時30分頃、遭難者Gは1人で漁船Hに乗り出港。午前7時40分頃、帰りの遅いことを心配した家族が携帯電話で連絡を取ろうとしたが電話が通じず、知人の漁業者Iに確認を依頼した。Iが海上を捜索したところ、漁船Hは発見したもののGを確認することができなかったため、平内町救難所茂浦支所へ応援を要請。救助船8隻が出動した。

救難所員3名が漁船Hに乗り込み船周辺を確認したところ、午前9時20分頃、アブラメ篭のロープに右足首が絡まっている状態のGを水中で発見。水中から引き上げた。

福岡県水難救済会相島救難所

平成22年10月31日午後4時頃、相島北川の鼻栗瀬付近で釣りをしていた遭難者Jが帰港しようとして船外機を始動しようとしたが、電圧不足により始動せず、漂流状態となった。Jに救助を求められた知人が現場に向かったものの発見できず、日没も近づき波浪も高く捜索が困難になりつつあったため、相島救難所に救助要請が入った。

救難所長は救難所員を招集し、直ちに捜索救助に向かった。鼻栗瀬東約500m付近でレーダーに船影を見つけ、該船を発見。相島港に曳航した。

該船は相島港でバッテリーチャージが行われ、翌朝帰港した。

千葉県水難救済会房総広域救難所

平成22年9月5日、富津岬で会社の同僚とともにバーベキューに興じていた遭難者Kは、付近で水上オートバイを遊走させていた別グループと意気投合。救命胴衣を着けずに3人乗りオートバイの最後尾に同乗した。遊走していたところ、午後3時20分頃、オートバイが転覆。乗船者は海中に投げ出された。再度オートバイに乗り込み1分ほど航走した後、操縦者がKの姿がないことに気付いた。

海上保安署の巡視艇や特殊救難隊、富津警察署などとともに房総広域救難所の救難所員も捜索に当たった。翌6日の午前9時35分頃、水深2mのところでKが発見され、救難所のダイバーがKを水面に引き上げた。

三重県水難救済会伊勢湾北中部地区
海難救助連絡協議会鈴鹿市漁協救難支所

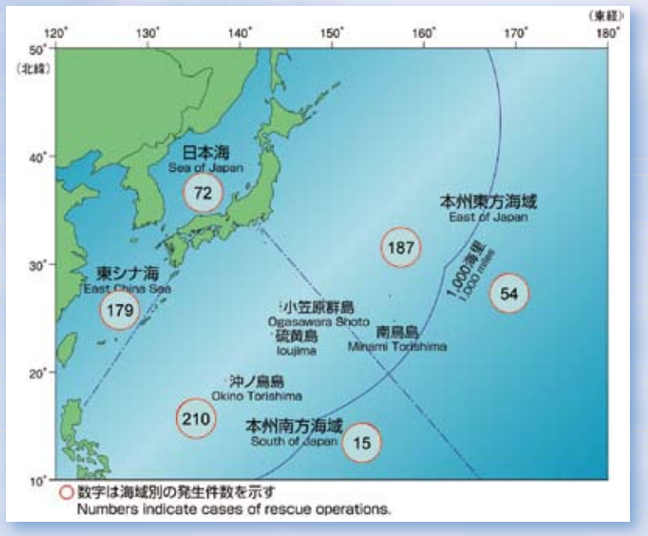
平成22年9月6日午前8時頃、鈴鹿市白子沖で漁をしていた漁船L丸の船長の目を、巻き揚げ装置につないでいた錨が直撃。船長は左眼球破裂の重傷を負った。海難事故発生の無線連絡が入り、近くで操業していた救難支所所属の第2大章丸が急行、L丸の船長を収容して白子港に搬送し、救急車に引き継いだ。一方、L丸は同じく救難支所所属の第18嘉栄丸に曳航され、白子港に寄港した。

洋上救急

事業開始以来、平成22年12月末までに717件もの洋上救急事案に対応しています

洋上救急事業は、社会保険庁や各諸団体からの資金援助と医療機関、医師・看護師、海上保安庁や自衛隊の全面的な支援を受けつつ、昭和60年10月の事業開始以来、平成22年12月末までに717件の事案に対応してきました。これまでに傷病者747名に対し、医師898名、看護師459名が出動し、診察や治療を行っています。

■洋上救急発生海域図（717件）



平成22年9月6日12：00発生

胸痛に苦しむ患者を、約4時間で救急搬送

心臓病を患っているモーターマンがいるとの連絡が海上保安庁に入り、医療助言を求めたところ、心筋梗塞の疑いがあるとのことで代理店から洋上救急の要請があった。

14 時 40 分、ヘリ MH961 に医師 1 名と潜水士 2 名が同乗し、該船に向けて石垣航空基地を出発。15 時、MH961 は該船と会合した。

同 32 分、該船より患者を吊り上げ収容、石垣航空基地へ搬送。同 55 分に MH961 は石垣航空基地に着陸し、患者を救急車に引き継いだ。

【発生位置】沖縄県波照間島の南東約 63 海里　北緯 23 度 13.4 分　東経 124 度 27.6 分
【傷 病 者】男性・49 歳　モーターマン（傷病名）胸膜炎
【出動医療機関、医師等】沖縄県立八重山病院　医師：1 名
【出動勢力】海上保安庁石垣航空基地　ヘリ MH961　石垣海上保安部 PC「なつづき」潜水士 2 名

平成22年9月9日05：00発生

18才の研修生救命のため、海上自衛隊に災害派遣を要請

操業中、仰向けに倒れている研修生が発見された。呼吸はあるものの呼びかけへの反応がなく、医療機関より早急に医師の診断が必要との助言を受け、船主から洋上救急の要請が出された。

6時18分、巡視船「ざおう」が発動。8時45分、海上自衛隊に災害派遣を要請。9時10分、ヘリMH906は仙台医療センターの医師1名と看護師1名を同乗し、「ざおう」に向けて仙台航空基地を出発。10時10分に到着し、医師等が降機。11時57分、飛行艇US-1Aに八戸市市民市立病院の医師2名が同乗し、八戸飛行場を出発。15時28分に該船付近に着水し、患者を機内に収容して16時3分に離水した。同35分、ヘリMH565は医師等を同乗し、仙台基地に向けて「ざおう」を出発し、18時15分に到着。同49分にUS-1Aは八戸飛行場に到着し、患者を救急車に引き継いだ。

【発生位置】宮城県金華山の東約 639 海里　北緯 38 度 38 分　東経 155 度 07 分
【傷 病 者】男性・18 歳研修生（傷病名）熱中症
【出動医療機関、医師等】仙台医療センター　医師：1 名　看護師：1 名、八戸市立市民病院　医師：2 名
【出動勢力】海上保安庁宮城海上保安部　PLH ざおう　ヘリ MH565　仙台航空基地　ヘリ MH906、海上自衛隊　飛行艇 US-1A 飛行機 P-3C

平成22年9月20日18：20発生

飛行機の支援を受けながら、ヘリにて患者を搬送

腹痛を訴える機関員の症状が悪化してきたため、韓国の病院に医療指示を求めたところ、直ちに医療機関へ搬送する必要があるとの連絡を受けたと、19時45分、代理店より洋上救急の要請を受ける。

21時、飛行機MA721は支援のため那覇航空基地を出発。同35分、ヘリMH961に医師1名と機動救難士2名が同乗し、該船に向けて那覇航空基地を出発した。22時15分、MH961が該船と会合し、同28分に着船。同32分に患者を機内に収容した。同38分にMH961は離船し、患者を那覇航空基地へ搬送。23時15分に基地に到着し、患者を救急車に引き継いだ。

【発生位置】沖縄県喜屋武崎の南東約 85 海里　北緯 24 度 55 分　東経 128 度 40 分
【傷 病 者】男性・24 歳機関員（傷病名）虫垂炎
【出動医療機関、医師等】沖縄県立南部医療センター・こども医療センター　医師：1 名
【出動勢力】海上保安庁那覇航空基地　飛行機 MA721　ヘリ MH961　機動救難士 2 名

平成22年9月23日14：03発生

巡視船を拠点に急性虫垂炎患者の救急医療を展開

司厨長が腹痛を訴えていると、該船の船長が洋上救急を要請。14時50分、巡視船「あかいし」発動。15時30分、飛行機MA951は救助支援のため鹿児島空港を出発した。同59分、ヘリMH963に医師・看護師各1名が同乗し、谷山ヘリポートを出発。16時15分、MA951は現場に到着し、調査を開始した。同44分、MH963は該船と会合し救助を開始、17時1分に救助完了し「あかいし」に向かう。同30分に「あかいし」に着船。18時10分、MH963が「あかいし」を離船。同53分にMH963は谷山ヘリポートに到着し、患者を救急車に引き継いだ。

【発生位置】鹿児島県諏訪瀬島の西約 38 海里　北緯 29 度 41 分　東経 128 度 58 分
【傷 病 者】男性・34 歳司厨長（傷病名）急性虫垂炎
【出動医療機関、医師等】鹿児島徳洲会病院　医師：1 名　看護師：1 名
【出動勢力】海上保安庁鹿児島海上保安部 PL「あかいし」、鹿児島航空基地　飛行機 MA951　ヘリ MH963　機動救難士 2 名

平成22年11月30日03：00発生

該船が遠距離航行中のため、海上自衛隊に出動を要請

長崎海上保安部を経由して十管区本部に、操業中の乗組員が左手小指を切断した旨の洋上救急の要請が船主から出された。発生場所が遠距離であることを勘案し、海上自衛隊に災害派遣を要請。10時49分、ヘリUH-60Jが鹿屋基地を出発、11時1分、ヘリに医師と看護師各1名が同乗し、谷山ヘリポートを出発した。12時10分に該船と会合、同23分に患者の吊り上げ救助が完了。13時34分に谷山ヘリポートに到着し、患者を救急車に引き継いだ。

【発生位置】鹿児島県草垣島の西約 250 海里　北緯 30 度 42 分　東経 126 度 43.7 分
【傷 病 者】男性・27 歳甲板員（傷病名）左手小指切断
【出動医療機関、医師等】鹿児島徳洲会病院　医師：1 名　看護師：1 名
【出動勢力】海上自衛隊　ヘリ UH-60J

平成22年12月8日05：35発生

ヘリと飛行機の連携で、爆発事故の負傷者を救命

8日の5時35分頃、油浄化装置の爆発事故により乗組員が右腕の一部を切断。医療機関に助言を求めたところ、止血するとともに至急医療機関に搬送する必要があるとの連絡を受け、船主から洋上救急の要請が出された。発生場所が遠距離であることを勘案し、航空自衛隊に災害派遣を要請。ヘリUH-60Jは南大東島で燃料を搭載した。11時30分、飛行機MA721に医師、看護師各1名が同乗し、南大東島に向けて那覇航空基地を出発。13時55分、南大東島で医師等をUH-60Jに移乗し、出発。15時48分にUH-60Jが該船と会合、患者を吊り上げ収容し、南大東島に向けて出発。18時5分に到着し、患者と医師等をMA721へ引き継いだ。MA721は19時20分に那覇基地に到着し、患者を救急車に引き継いだ。

【発生位置】沖縄県沖縄本島の南約 400km　北緯 20 度 51 分　東経 132 度 1 分
【傷 病 者】男性・23 歳　モーターマン（傷病名）右上腕部および胸負傷
【出動医療機関、医師等】沖縄赤十字病院　医師：1 名　看護師：1 名
【出動勢力】海上保安庁那覇航空基地　飛行機 MA721　機動救難士 2 名、航空自衛隊　ヘリ UH-60J

RESCUE REPORT

■平成22年 その他の洋上救急の状況（平成22年12月末現在）

発生日時	発生位置	傷病者	状　況
平成22年 9月18日 （00：34）	鹿児島県種子島の 東約18海里 北緯30度40.3分 東経131度21.1分	男性・64歳 一等機関士 （傷病名） 急性心不全	一等機関士が航行中に心臓発作を起こし、意識不明となった。船長から洋上救急の要請があり、緊急を要するとのことで海上自衛隊に災害派遣要請。3時、ヘリUH-60Jに医師・看護師各1名が同乗し、谷山ヘリポートを出発。同45分に該船と会合し、4時7分に患者を吊り上げ収容。同35分にUH-60Jは谷山ヘリポートに到着し、患者を救急車に引き継いだ。
平成22年 9月24日 （17：00）	宮城県金華山の東 約1239海里 北緯37度45分 東経167度10分	男性・28歳 甲板員 （傷病名） 胃潰瘍	甲板員がみぞおち付近に痛みを訴え、医療機関の助言を求めたところ、早急に医師の診察が必要とのこと。船主より洋上救急の要請を受け、26日7時35分、巡視船「ざおう」を発動。15時40分、「ざおう」は搭載艇を使用し該船から患者を収容した。28日8時15分に海上自衛隊に災害派遣を要請し、P-3Cが八戸基地を出発。また、12時7分に飛行艇US- 1Aは医師2名を同乗し、八戸基地を出発した。しかし現場海域が荒天のため着水不可と判断し、US-1Aは現場を離脱し八戸基地に戻る。医師は患者の容体について、「ざおう」による搬送で支障なしと判断した。29日、ヘリMH565は患者を同乗し、仙台基地に向けて「ざおう」を離船。18時仙台基地に到着し、患者を救急車に引き継いだ。
平成22年 9月30日 （13：10）	宮城県金華山の東 南東約1080海里 北緯33度1.8分 東経162度39分	男性・33歳 司厨長 （傷病名） 胃腸炎	司厨長が腹痛を訴え、医療機関に助言を求めたところ、早急に医師による診察が必要との回答であった。30日16時に代理店により洋上救急要請。18時に特殊救難隊2名を同乗し、LAJ500は仙台基地に向けて羽田空港を出発。18時25分に仙台医療センターの医師2名が巡視船「ざおう」に乗船。同50分にLAJ500は仙台基地に到着し、特救隊2名は「ざおう」に乗船した。19時50分、「ざおう」出港。 一方、緊急を要するため海上自衛隊に災害派遣を要請し、10月1日9時52分、P-3Cは現場海域に向けて厚木基地を出発。10時28分、飛行艇US-1Aに東海大学の医師等3名が同乗し、厚木基地を出発した。14時16分、US-1Aは患者を機内に収容し、17時42分厚木基地に到着、患者を救急車に引き継いだ。
平成22年 10月9日 （19：00）	沖縄県魚釣島の北 北東約20海里 北緯26度3.4分 東経123度33.5分	男性・54歳 首席主計士 （傷病名） 脳梗塞	首席主計士が気分悪化しろれつが回らない状態となったため、医療機関に助言を求めたところ、早急に医師による診察が必要であるとの回答であった。9日21時50分、洋上救急の要請。22時5分、ヘリMH714に医師1名を同乗し、該船に向けて石垣航空基地を出発。23時50分に該船に着船、患者を収容し、石垣航空基地へ搬送した。10日0時45分石垣航空基地に到着、患者を救急車に引き継いだ。
平成22年 11月11日 （12：22）	沖縄県西表島の南 約183海里 北緯21度8.3分 東経123度59.3分	男性・25歳 操舵員、男性・22歳機関員、男性・27歳機関士 （傷病名） 肺炎の疑い （全員）	10日頃、該船が沈没。乗組員は行方不明となり、台湾CG、海上保安庁で救助活動を実施。台湾CGと巡視船「もとぶ」で救助した3名が発熱し、医療機関より肺炎の疑いがあるため至急医療機関に搬送する必要があるとの助言を受けた。船主から洋上救急の要請が出される。自衛隊に災害派遣を要請。11日15時45分、ヘリUH-60Jに医師1名が同乗し、石垣空港を出発。17時39分に「もとぶ」から患者1名、同54分に台湾CGから患者2名を吊り上げ収容し、石垣空港に向かった。19時20分に到着し、患者を救急車に引き継いだ。
平成22年 11月13日 （12：38）	沖縄県沖縄本島の 南東約320海里 北緯21度50分 東経131度15分	男性・39歳 甲板員 （傷病名） 首右側および腹部を刃物で刺され出血	13日12時38分頃、乗組員同士でけんかになり、1名が刃物で刺され負傷した。医療機関に助言を求めたところ、圧迫止血して至急医療機関に搬送する必要があるとの回答だったため、船主から洋上救急の要請。航空自衛隊に災害派遣を要請した。14日8時5分、ヘリUH-60Jに医師1名が同乗し、那覇空港を出発。9時41分に該船と会合し患者を吊り上げ収容、那覇空港に向かった。11時22分にUH-60Jは那覇空港に到着し、患者を救急車に引き継いだ。
平成22年 12月27日 （19：00）	沖縄県喜屋武埼の 東南東約180海里 北緯24度33分 東経130度29分	男性・64歳 作業員 （傷病名） くも膜下出血	乗組員の意識がもうろうとなり呼吸・脈が弱い状態であるとの連絡があり、医療機関の助言を求めると至急医療機関に搬送する必要があるとのことだった。20時19分に船長から救急要請。海上保安庁の航空機では距離的に対応が困難であったため、航空自衛隊に災害派遣要請を行った。21時58分にヘリUH-60Jに医師・看護師各1名が同乗し那覇空港を出発。23時10分に該船と会合し、飛行機U-125Aの支援を受けながら患者を吊り上げ収容。翌28日1時5分に那覇空港に戻り、患者を救急車に引き継いだ。
平成22年 12月28日 （09：18）	鹿児島県草垣島の 南西約100海里 北緯30度04分 東経127度47分	男性・24歳 司厨員 （傷病名） 急性虫垂炎	乗組員が腹痛を起こしている旨の連絡があり、代理店より洋上救急の要請があった。緊急性があり発生場所が遠距離であったため、11時54分に海上自衛隊に災害派遣要請を行う。12時35分にヘリUH-60Jが鹿屋基地を出発、谷山ヘリポートにて医師・看護師各1名を同乗させた。14時8分にヘリは該船と会合し、同18分、患者を吊り上げ収容。15時4分に谷山ヘリポートに到着し、患者を救急車に引き継いだ。

■洋上救急の発生状況（昭和60年度～平成22年度）（平成22年12月31日現在）

項目＼年度		昭和60年～63年	平成 1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	計
発生件数		98	42	36	35	42	30	29	27	16	31	30	32	23	18	24	23	37	31	16	26	21	23	27	717
傷病者		101	47	36	36	45	35	29	28	16	31	30	32	23	18	24	28	41	31	16	27	21	23	29	747
医師等		193	71	63	65	77	60	54	53	33	53	52	60	50	36	46	50	68	54	31	51	37	42	58	1,357
（看護師の再掲）		71	24	22	26	28	21	19	22	10	17	16	23	17	13	14	15	12	17	12	17	9	(15)	(19)	(459)
海上保安庁	巡視船	98	34	30	24	25	16	13	24	11	23	11	23	16	13	11	14	28	19	16	19	11	15	18	512
	航空機	120	55	52	47	65	34	29	35	18	35	30	21	24	16	34	30	60	43	25	31	32	38	25	899
	特救隊等	29	18	20	14	20	22	18	17	15	12	20	12	10	11	10	18	25	25	17	26	32	39	22	452
自衛隊機		23	12	2	5	**	4	7	6	4	7	10	19	16	10	13	13	10	12	3	20	7	4	25	232
民間船		1	**	**	**	1	**	1	**	**	**	**	**	**	**	**	**	**	**	**	**	**	1	**	4

ボランティアスピリットの継承のために

水難救済思想の普及活動レポート

日本水難救済会では、海事思想や水難救済会ボランタリー思想を啓蒙することにより、将来の後継者になってもらえるよう、海上保安官やライフセーバーの方々を講師に招き、青少年を対象とした水難救済ボランティア教室を全国で展開しています。

（社）日本水難救済会（昭島市立拝島第二小学校）

平成22年度　若者の水難救済ボランティア教室

「若者の水難救済ボランティア教室」は平成13年度から始まった事業で、小中学生や高校生等の若者に海の知識を深めてもらうとともに海に親しむ機会を与え、実地体験を通して救命技術を習得してもらうことを目的としています。さらに、海での安全意識の向上を図るとともに水難救済ボランタリー思想を啓蒙しています。今年度も国土交通省・海上保安庁・消防庁から後援を受け、各地で開催されています。12月までの報告では、20の地方水難救済会において71教室開催され、6,046名が参加しています。ここでは、各地での模様をピックアップしてご紹介します。

■（社）日本水難救済会

平成22年7月13日、昭島市立拝島第二小学校において5、6年生134名を対象に教室を開催しました。

日ごろから生徒会活動で青い羽根募金に協力していただいている関係で学校から依頼をいただいたもので、講師を第三管区海上保安本部救難課および東京海上保安部に依頼し、事故発生時の対応および自己救命策の説明、水慣れ（プールで水流をつくり漂流する模擬体験）、着衣泳、背浮、身近な物を利用した救命方法などを講習しました。

当日はあいにく小雨混じりの肌寒い日でしたが、生徒たちは元気いっぱいで、にぎやかながらもまじめに受講し、練習の始めと終わりには、それぞれ代表の生徒から礼儀正しい挨拶とお礼の言葉をいただきました。

■NPO神奈川県水難救済会

平成22年8月7日、平塚市の平塚新港および荷さばき施設にて、小学4～6年生77人を対象にボランティア教室を開催しました。

湘南海上保安署や地元ライフセーバーの方々にご協力いただきながら、心肺蘇生法や、ペットボトルを使用した救助などを体験。講師の方々の現場での体験談を交えた講義に、小学生たちは強く刺激を受けたようでした。

■石川県西部水難救済会

国立能登青少年交流の家より要請を受け、平成22年6月26日にボランティア教室を開催。国立能登青少年交流の家では、文部科学省委託事業として、高校生・専門学校生・大学生および社会人を対象にボランティア・自然体験活動補助指導者養成研修を行っており、今回はそのプログラムの１コマとして、「学ぼう!命の救い方」と題して水難救助講習を行いました。

講習では金沢海上保安部の海上保安官に講師を依頼し、室内プールにおいて水難救助法や着衣泳等を指導しました。

■新潟県水難救済会

平成22年7月8日、新潟市立山の下中学校にて、同校の1年生150人参加によりボランティア教室を行いました。

夏休み中の小中学生の海浜事故発生状況などについて講義を行った後、プールで事故防止策と救助法を指導。背浮きやペットボトルを使用した浮力確保の練習、救命胴衣を着用したうえでの水泳体験などを行いました。

報道関係4社の取材もありインタビューに応じるなど、生徒たちは初めての体験に積極的に取り組んでいました。

■京都府水難救済会

平成22年7月16日、京都市新町小学校にて6年生 84名やその保護者32名など138名参加によりボランティア教室を実施。京都市教育委員会からは「着衣泳を体験させてほしい」とい強い要望があったため、着衣泳を中心にプログラムを組みました。

水中での着衣の影響や水の力を体感した児童たちは、水の事故防止を心がけることを感想文で約束してくれました。

また、教室の模様が地元テレビや新聞で紹介され、水難事故防止について幅広い層へ啓発することができました。

VOICE ボランティア参加者の声

ボランティア教室に参加した児童による感想やコメントを紹介します。

「自分でじょうずにうけるようになりました！」

（東京都／小学6年生）

いそがしい中、来ていただきありがとうございました。

あの日はさむかったけどちゃんとうけました。

もし、海に行っておぼれている人を見たら、(1)大人を呼ぶ　(2)電話をかける　(3)うく物をなげる…を、ちゃんとやります。

自分がおぼれてしまったら、せおよぎで助けがくるまでまつか、浜までおよぎます。

練習では、およぎが上手じゃないので、「もっとお腹上げて！」と言われました。言うとおりにして空を見たら上手にうけました！

そして上手にうけるようになるまでやって、やっと言われなくても出来るようになれました！

くつがうくこともよーくわかりました。しずむと思っていたのでびっくりしました！せおよぎをしたらくつがういたのですごい！と思いました。進むのは、あまり出来なかったけど、またやるきかいがあったら、がんばって出来るようになろうと思います。

ペットボトルも、思ったよりういて、ふつうにうくよりおよげました！

プールサイドからおちる練習はちょっとこわかったです。なぜかというと水が鼻に入っていたかったからです。

本当の時はもっとパニックになるんだろうなと思いました。もし、本当におぼれた時があったら、がんばっておちついて、思い出して助かればいいなと思います！

「日ごろの練習の大切さを学びました」

（石川県／高校3年生）

水難救済ボランティアに参加することによってたくさんの知識などを学べることが出来たので本当に良かったです。水難にあったときにどういう対処方法を取れば助かりやすくなるのかなど、海上保安部の方々に丁寧に教えてもらえたので良かったです。また海猿の方に教えてもらったのですが、日頃の練習は本番以上に厳しくなければ本番では人を助けられないと聞いて、自分も練習をもっと厳しくして大会ではしっかり力を発揮できるようにしたいと思いました。また、羽咋消防署の方からは心肺蘇生法を習いました。すぐに使えることなのでもしそういう場面があったら、人を助けたいです。

「身近な物で人を助けられることが分かりました」

（茨城県／小学5年生）

着衣水泳を教えてくれて、ありがとうございました。着衣をきたまま、プールにはいるのは、少しおどろきましたが、なれてくると背浮きでもできるようになりました。

ペットボトルや長ぐつ、ビニールぶくろ、クーラーボックスを使って、ういたり、人を助ける物になるので、すごいと思いました。また、ライフジャケットを着ることがはじめてなので、わくわくしました。使ってみると、本当に、うきました。テレビで、ライフジャケットを着ている人をみたので、私も、ライフジャケットを使えて良かったです。

ペットボトルや身近な物で、人を助けられるということが分かって良かったです。これからも、お仕事がんばってください。

「もしもの時に役立つことをたくさん学びました」

（富山県／中学3年生）

私は水難救済ボランティア教室を受けて、もしもの時にためになることをたくさん学びました。海上保安庁の方のお話では、離岸流の危険さや、流されてしまった時のための泳ぎ方などを教わりました。

また、実習では胸骨圧迫や、人工呼吸を体験し、とてもきちょうな体験をさせていただきました。今までよく知らなかった、AEDの使い方もわかるようになり、家族や友達が倒れてしまったような時でも、救急隊が来るまでの間、自分でどうにかできるかなと思いました。とても、いい体験になりました。

「着衣泳と、ふだんの水泳とのちがいにおどろきました」

（茨城県／小学5年生）

ぼくは、着衣泳を初めてやってみて、ふだんの水泳とのちがいに、おどろきました。プールに入ったとたんに動きにくくなり、あがったら服が体にくっついて、少し気持ち悪かったです。でもそれが着衣泳なんだなあと思いました。服のまま水中に入ると、動きが悪くなり、おぼれてしまうというのがよく分かりました。そんな時、ペットボトルや、クーラーボックスがあれば、すごく役に立つというのが、おどろきました。ライフジャケット体験も楽しかったです。ありがとうございました。

「人を助けるための、知識と勇気を得た体験でした」

（石川県／高校2年生）

周りに倒れている人がいたら勇気をもって助けに行けますか？私はこの講習会がなかったらきっと何も出来ずにただ見ていることしかできないと思います。なぜなら、救助の仕方がいまいちわからないから。あいまいなのに、人を助けるという行動には移れません。今回、救助の仕方を詳しく教えてもらい、実際に模型を使っての救助の練習をしました。思っていた以上に誰でも出来ることだったので、もし何かあった場合は勇気をもって助けたいです。今回、講習会に参加して、人を助けるということは大変だけど、本当に素晴らしいことだと思いました。自分にとっても凄くためになる良い経験でした。

平成22年度第1回互助会理事会開催

平成22年10月26日、海事センタービル8階会議室において、日本水難救済会救難所員等互助会第1回理事会が開催されました。議案は、次のとおりです。

○第1号議案
平成21年度事業報告及び収支決算(案)について
○第2号議案
平成22年度事業計画及び収支予算(案)について

以上が審議され、それぞれ異議なく承認されましたので、報告いたします。

第1回理事会において承認された項目

○平成21年度事業報告及び収支計算書については、別添1および2のとおりです。
○平成22年度事業計画及び収支予算書については、別添3および4のとおりです。

互助会事務局から

互助会発足から2年が経過し、去る9月30日互助会入会の更新等を実施いたしました。結果、22年度(23年1月現在)において21,914名の方々が会員となっております。(21年度は22,099名)

互助会としましては、救難所員等の方々が安心して救難業務等に従事できるようサポートしていきたいと思っておりますので、よろしくお願いいたします。

なお、事務局といたしましては、発足以来の目標である会員3万名を目途に、「500円で大きな安心を」のキャッチフレーズで会員募集(随時)に努めております。未加入者の加入について、よろしくお願いいたします。

平成 22 年度第 1 回互助会理事会の様子

[別添1]

平成21年度事業報告

(平成21年10月1日から平成22年9月30日まで)

互助会は、日本水難救済会の正会員となっている地方水難救済会に所属する救難所員等(役職員含む。)で、入会を希望する者(会員)で構成され、会員およびその家族(会員等)の相互救済と福利増進を図る観点から各種事業を行うことにより、会員等の生活の安定と福祉に寄与するとともに、日本水難救済会の効率的な事業運営に資することを目的として事業を実施してまいりました。

1. 加入者数について
平成21年度の加入者数は22,099名でした。

2. 災害給付及び見舞金給付事業
(1)災害給付事業
会員が水難救助業務中に災害を受けた場合に、本人又はその遺族に対して互助会規約の定めるところにより所定の給付を行い、また、会員が前記の災害により死亡した場合に、2万円を限度として花輪又は生花を遺族に贈るための事業ですが、21年度において該当する事例はありませんでした。
(2)休業見舞金給付事業
会員が水難救済業務中に負傷し又は疾病にかかり、従前得ていた業務上の収入を得ることが出来ない場合に、規約の定めるところにより、所定の見舞金を給付するための事業ですが、21年度において該当する事例はありませんでした。
(3)私物損害見舞金給付事業
会員が水難救助業務中に、当該業務の遂行中に携帯していた私物を破損、焼失、紛失等した場合、規約の定めるところにより、所定の見舞金を給付するための事業ですが、21年度において2件の事案(22.6.28付け)に対して、6万円の見舞金を給付しました。
(4)遺児等育英奨学金事業
災害給付を受けた会員の遺児(重度の後遺症を負った会員の子で、遺児と同等認められる者を含む)に対し規約の定めるところにより、所定の奨学金を給付又は、貸与するための事業ですが、21年度において該当する事例はありませんでした。
(5)災害見舞金給付事業
会員が自然災害又は火災等により、住居及び家財又は、それらのいずれかに被害を被った場合、規約の定めるところにより、所定の見舞金を給付する事業ですが、21年度において該当する事例はありませんでした。
(6)互助会誌発行事業
事業成果、決算報告等の周知のため、互助会誌を発行する事業ですが、21年度においては互助会誌発行に代わり、「マリンレスキュージャーナル」1月号、8月号それぞれに互助会コーナーを設け、第1回理事会開催、平成21年度事業報告および収支計算書、平成22年度事業計画および収支予算書、互助会加入者数の状況、給付事業状況等を掲載し、会員各位に周知いたしました。

[別添2]

平成21年度互助会収支計算書

(平成21年10月1日から平成22年9月30日まで)

(単位：円)

科　　目	予　算　額	決　算　額	差　　異	備　　考
Ⅰ事業活動収支の部				
1．事業活動収入				
1会費収入				
互助会会費収入	11,000,000	11,049,500	-49,500	22,099 人
2雑収入				
受取利息収入	0	6,412	-6,412	
事業活動収入計	11,000,000	11,055,912	-55,912	
2．事業活動支出				
1事業費支出	7,232,000	2,292,000	4,940,000	
互助会事業保険料	2,232,000	2,232,000	0	
互助会事業給付金	2,000,000	60,000	1,940,000	
互助会事業貸付金	2,000,000	0	2,000,000	
互助会誌発行	1,000,000	0	1,000,000	
2管理費支出	4,422,400	4,762,968	-340,568	
人件費ほか				
事業活動支出計	11,654,400	7,054,968	4,599,432	
事業活動収支差額	-654,400	4,000,944	-4,655,344	
Ⅱ予備費支出	1,000,000	0	1,000,000	
当期収支差額	-1,654,400	4,000,944	-5,655,344	
前期繰越収支差額	8,886,624	8,886,624	0	
次期繰越収支差額	7,232,224	12,887,568	-5,655,344	

[別添3]

平成22年度事業計画

(平成22年10月1日から平成23年9月30日まで)

互助会は、日本水難救済会の正会員となっている地方水難救済会に所属する救難所員等(役職員含む。)で、入会を希望する者(会員)で構成され、会員およびその家族(会員等)の相互救済と福利増進を図る観点から各種事業を行うことにより、会員等の生活の安定と福祉に寄与するとともに、日本水難救済会の効率的な事業運営に資することを目的として設置、運営されるものであります。

1. 会員の募集について
平成21年度の加入者数は、22,099名でありましたが、22年度においても引き続き会員の募集に努め、互助会の安定した運営を図るために、会員数30,000名を目途に努力してまいります。

2. 災害給付及び見舞金給付事業等
(1)災害給付事業
会員が水難救助業務中に災害を受けた場合に、本人又はその遺族に対して互助会規約の定めるところにより所定の給付を行い、また、会員が前記の災害により死亡した場合に、2万円を限度として花輪又は生花を遺族に贈る。
(2)休業見舞金給付事業
会員が水難救済業務中に負傷し又は疾病にかかり従前得ていた業務上の収入を得ることが出来ない場合に、規約の定めるところにより、所定の見舞金を給付する。
(3)私物等損害見舞金給付事業
会員が水難救助業務中に、当該業務の遂行中に携帯していた私物を破損、焼失、紛失等した場合、規約の定めるところにより、所定の見舞金を給付する。また、会員が水難救助業務中に、当該業務の遂行中に使用していた船舶の船体・属具を破損等した場合、規定の定めるところにより、所定の見舞金を給付する。
(4)遺児等育英奨学金事業
災害給付を受けた会員の遺児(重度の後遺症を負った会員の子で、遺児と同等と認められる者を含む)に対し、規約の定めるところにより、所定の奨学金を給付又は、貸与する。
(5)災害見舞金給付事業
会員が自然災害又は火災等により、住居及び家財又は、それらのいずれかに被害を被った場合、規約の定めるところにより、所定の見舞金を給付する。
(6)互助会誌発行事業
事業成果、決算報告の周知等のため、互助会誌を発行する。

[別添4]

平成22年度互助会収支予算書

(平成22年10月1日から平成23年9月30日まで)

(単位：円)

科　　目	予　算　額	前年度予算額	増　　減	備　　考
Ⅰ事業活動収支の部				
1．事業活動収入				
1会費収入				
互助会会費収入	11,000,000	11,000,000	0	22,000 人
2雑収入				
受取利息収入	6,000	0	6,000	
事業活動収入計	11,006,000	11,000,000	6,000	
2．事業活動支出				
1事業費支出	7,480,000	7,232,000	248,000	
保険料支出	2,480,000	2,232,000	248,000	
互助会給付金支出	2,000,000	2,000,000	0	
奨学金貸与支出	2,000,000	2,000,000	0	
会誌発行費支出	1,000,000	1,000,000	0	
2管理費支出	4,270,000	4,422,400	-152,400	
人件費ほか				
事業活動支出計	11,750,000	11,654,400	95,600	
事業活動収支差額	-744,000	-654,400	-89,600	
Ⅱ予備費支出	1,000,000	1,000,000	0	
当期収支差額	-1,744,000	-1,654,400	-89,600	
前期繰越収支差額	12,887,568	8,886,624	4,000,944	
次期繰越収支差額	11,143,568	7,232,224	3,911,344	

当会が初めて「海外からの寄付」を経験

英国ダラム大学東洋美術館　館長様より多額の寄付をいただきました

イギリス・ダラム大学東洋美術館　館長のクレイグ バークレイ様（Mr. Craig Peter Barclay）より、当会に多額の寄付をいただきました。

去る平成 22 年 10 月、UK ドメインのメールが届きました。それは、「当会に寄付を行う用意がある」という内容のものでしたが、当会の職員としても初めての経験であり、「海外からの寄付など信じられない」と半信半疑で返信を差し上げたのが始まりでした。

何通かメールのやり取りを行い、同年 11 月 12 日、実際に口座へのお振り込みを確認したところです。

この寄付に対し、当会会長よりバークレイ様に感謝状および有功章を贈呈しました。クレイグバークレイ様、ありがとうございました。

英国ダラム大学東洋美術館　館長
クレイグ バークレイ様

「全国大会」を開催しよう！

NPO 秋田県水難救済会との交流の経験から提言

北海道漁船海難防止・水難救済センターでは、平成 21 年 7 月 10 日に秋田県岩館漁港で開催されたNPO 秋田県水難救済会の海難救助訓練大会に参画し、交流を図りました。

北海道でも救難所員の技術の向上と漁船海難の未然防止のため、全道大会を毎年開催しています。昭和 49 年から実施している訓練も昨年で 36 回になりますが、果たして北海道と他県では訓練内容等にどのような違いがあるのかなどを研鑽し、今後の訓練内容等に役立てようという思いから、このたび参画させていただいたものです。

当日はあいにくの雨模様ではありましたが、救難技術競技など所員約 250 名が日ごろの訓練成果をいかんなく発揮し、キビキビと統制の取れた訓練を展開されている様子を見学させていただきました。

今回の経験は当センターにとって、今後の全道大会開催に向けた大きな参考になるとともに、他県の水難救済会との交流について、とても意義深いものが得られた機会であると感じております。

この経験から、北海道独自の訓練大会も必要ではありますが、普段研鑽している救難所員の技術等をその地域だけで眠らせておくのではなく、地方水難救済会同士の交流の場（全国大会）を設けていただくと、所員の意識の向上を図れるとともに全国民に向けた水難救済活動の PR も実現するのではないかと考えます。ぜひとも全国大会の開催を検討していただければうれしく思います。

投稿：（社）北海道漁船海難防止・水難救済センター

INFORMATION

●助成金を受けて行う事業には助成団体を明示

本会および地方組織が行う事業には、日本財団をはじめとする団体から助成金等の交付を受けて実施しているものがあります。ご承知のことと思いますが、海難救助訓練などがこれに当たります。

従って、看板や訓練資料、機材などを購入あるいは作成するに当っては、これら助成金を受けている団体名を必ず表記するよう、改めてお願いします。

●日本水難救済会会員募集

日本水難救済会では、会員（2号正会員または賛助会員）となって本会の事業を支援していただける方々を募集しています。

2号正会員資格は、本会の事業目的に賛同して、年会費1口1万円（1口以上）を納付された方で、会員になりますと、総会に出席することにより当会事業に参画できます。

賛助会員は、金品を寄付することにより本会の事業に貢献いただくもので、寄付された方は、法人税・所得税の控除を受けられる特典があります。

希望される方は、当会にご連絡いただければ、入会申込書をお送りいたしますので、必要事項を記入してお申し込み下さい。

編 集 後 記

☆全国の地方水難救済会、救難所・支所の皆様、新年明けましておめでとうございます。『マリンレスキュージャーナル』を、本年もよろしくお願いします。

☆マリンレスキュー紀行では社団法人　琉球水難救済会のオクマ救難所・国頭救難所を取材させていただきました。また、今号の歴史探訪シリーズについても、前号に引き続き琴陵泰裕様に執筆いただきました。ご協力いただきました皆様に、厚く御礼申し上げます。

☆社団法人　北海道漁船海難防止・水難救済センターより、ＮＰＯ秋田県水難救済会との交流について寄稿をいただきました。全国大会についてもご意見を寄せていただきましたが、救難所員の意識の向上や活動のＰＲに意義があると思われますので、ぜひ検討していきたいと考えています。

☆皆様の投稿等をお待ちしております。なお、マリンレスキュー紀行の取材希望がありましたらご連絡をお願いします。取材は6 ～ 7月となる見込みです。

（常務理事　上岡）

制作・印刷　エイアンドエー株式会社